

がんばる工織大生 | Active KIT students

建築設計を通じて「丹波漆」を未来につなぐ

京都府北西部に位置する福知山市夜久野町は
 全国でも希少な漆の産地として知られています。
 ここで生産されている漆が「丹波漆」です。
 千年以上の歴史を誇る丹波漆ですが、
 漆産業の衰退とともに現在は存続の危機にあります。
 この産業を未来につなごうと奮闘する
 建築学専攻M1の菰田侑菜さんに
 お話を伺いました。



Fig.1——思いを詰め込んだ発表用パネルと



Fig.2——漆・人・建築が共に成長する設計

京都北部地域の課題解決に貢献したい

今回、私はデザイン・建築学課程の卒業制作で、丹波漆の継承・発展をテーマとした「丹波漆伝承物語」という作品を制作しました。私はもともと「地域創生Tech Program」（京都府北部をフィールドに、地域課題をテーマとした学習やインターンシップによる多様な実践的体験を積む教育プログラム）に参加していて、京都北部の方々とつながりがありました。それで、卒業制作のテーマを決める時に「京都北部地域の課題解決に貢献できないかな」と考えたのです。調べうちに、福知山市夜久野町の伝統産業「丹波漆」と出会い、漆の木の減少や漆かき職人（木に鎌で傷を付けて漆を採る職人）の後継者不足、住民からの認知度低下という問題に直面していることを知りました。その危機的状況に対して、問題を解決できる建築物の提案を目指そう、というのが研究の出発点でした。

研究テーマを決めてからは、積極的に情報収集を行いました。そもそも漆についての知識がなかったので、まずはNPO法人丹波漆という団体が実施していたプロジェクトに参加。月1回勉強会に行ったり、漆の植樹祭「うるかむまつり」を訪れて実際に漆を植えたりしました。この活動の中で、NPOの職員の方はもちろん、漆を研究している方との交流を深められました。意識していたのは、現地へ足を運んで地域の方から直接話を聞くこと。どんな思いで漆を扱っているのか、何が必要とされているのかなど、コミュニケーションを取りながらしっかり理解を深めていく大切さを学びました。

漆と、人と一緒に成長していく建築

リサーチを進める中で知ったのが、漆の木は、苗を植えてから漆液が採れるまでにちょうど10年程度かかるということ。この時間軸に着目して、建築コンセプトを設定しようと決めました。そして、10年かけて漆の木と一緒に人も建築もだんだん育っていく、そして共存していくという、未来を志向

した設計に取り組みました。建築の形態としては、職人が使用する櫓に着目しました。地元の間伐材を用いて、用途ごとに格子スパンを変更しながら、漆の木と共に建築を徐々に増やしていく計画です。漆珈琲喫茶や漆蠟燭工房など、漆に関する体験型のプログラムを実施することで、住民が日頃から漆に関わり、年月が経つごとに人々の生活が漆の森にあふれ出していきます。完成した「丹波漆伝承物語」の作品では、植樹1年目から20年目までの漆・人・建物のストーリーを1年ごとに描くとともに、50年後の想像図も提示しています。11年目以降になり漆が取れるようになると、建築の床に漆液を塗り、伐採した漆の木を壁材として使用し、10年おきに更新していきます。そうすることで50年先も建築が受け継がれていき、同時に漆の森の伝統も受け継がれていくという未来を見据えています。

今後も夜久野町に関わり続けたい

2024年の春には夜久野町にある「やくの木と漆の館」という施設で、この卒業制作を地域の方々に発表させていただきました。コンセプトに共感してくださった方の働きかけで、今後は公式に福知山市のプロジェクトとして進めていこうという話も出ています。さらに、福知山市役所の方の尽力で、2025年大阪・関西万博の関西パビリオン京都ブースに1週間展示するという計画も立ち上がりました。皆さんの思いを受け止め、今後も夜久野町に貢献できるように頑張っていきたいです。

今回の卒業制作では、地域のポテンシャルを最大限に生かし、未来を見据えた建築を設計することを大切にしていました。この設計理念は、将来建築設計の仕事に就いた際にも、変わらず持ち続けていきたいです。どんな場所であっても、建築を設計する時、周りには必ず人がいて、その地ならではの風土があります。そうした人・風土のポテンシャルを尊重し、引き出せる設計士でありたいと考えています。

福知山市の伝統産業「丹波漆」の存続に向けて
 漆の森と共存する建築を提案。